

場所と政治研究

リン・ステーリ*
(本岡 拓哉** 訳)

Lynn A. Staeheli. (2003):
Chapter 11 Place. J. Agnew, K. Mitchell, and G. Toal (eds.)
In A Companion to Political Geography. pp. 158-170.

場所。余りにも簡素な用語である。そのため、この概念を容易に定義し、叙述できると思われるかもしれない。しかし、「場所」は人文地理学において最も議論になる用語になってしまっている。おそらくこれは、この用語によって喚起される感情や情動—ホーム（家庭、故郷・郷土）、定着性、秩序、環境、コンテクスト—がそうさせているのであろう。また、この簡素な用語が多くの議論で慣用語となっており、様々な認識論や理論を主唱する者たちが、その用語を多様な方法で使用しているからでもあろう。あるいは、場所の意義や重要性が、その場所における社会的な役割に依存しているように見えるからかもしれない。例えば、ホームはそこで直面する責任や家庭における他人との関係に応じて、保護や安全のための場所になり、一方で、労働や危険の場所にもなりえるのである。

本章では、場所が理解され、それが政治研究に活用される様々な方法を検証する。第Ⅰ節では、政治における空間性を理解するために、いくつかの場所の定義について記述し、それらの定義の含意について論じる。第Ⅱ節では、場所が政治行動に動員される方法を検討し、ある特定の研究でなされる場所の定義や理解にはそれ自体、政治（政治的・社会的目的を反映する政治）が含まれていることを論じる。

1. 場所を定義する

もし、場所が地理学者たちにとって重要な用語だとするならば、地理学の基礎的な教科書においてその用語の定義づけが期待されよう。しかし、それは思い違いである！というのも、1999年と2000年に出版された8冊の教科書のうち、場所の定義づけを行っているのは1冊に過ぎない。テリー・ジョーダン・ビチコフとモナ・ドモシュは場所を以下のように定義している。

場所とは、主観、個性記述、人文主義、文化に関心を向ける地理学が、科学の諸原理を不備のあるもの、無意

識にバイアスが掛けられたものとして退けながら、個々の地域や場所の特異性を理解するために使うタームのこと。(1999, p.535)

これは多くの点で興味深い定義であるが、場所それ自体が価値を持つ概念というよりもむしろ、地理学的分析の一つのタイプとして場所を定義しているようである。

この他に場所を定義している出典としては、地理学の基礎的な参考文献があろう。ここでは *Dictionary of Human Geography* (Johnston et al. 2000) が最も適切な出典である。その書き出しは「地理的空間の一部」(p.582) と始まる。この定義は単

* コロラド大学

** 大阪市立大学・院

純で正確ではあるが、一方で重要な概念でありうるいくつかの意味を除外しているために、不毛なものになっている。その書き出しに続いては、論争の意義が提示されており、主として、他の用語や概念に言及している。つまり、ここでも場所それ自体は、詳細に定義づけられているわけではないのである。

それに対して、皮肉にもメリアム・ウェブスター辞書が、地理学の出典よりも場所の定義への適切なきっかけを提示してくれている。ここで場所はいくつかの方法で定義づけられている。

場所／名詞 1: 空間 2: 不定形な地域: Area 3: 特別な目的で使われる建造物や場所 4: 人口の中心 5: 地表の特定の部分: 地点 6: スケールや順序における相対的位置; また: 高い位置, 特に競争において 2 番目 7: 宿泊所: 特に seat 8: 仕事; 特に官公庁 9: 公共広場

場所／動詞 1: 規則的に分配する: ARRANGE 2: 特定の場所におく: SET 3: 確認する IDENTIFY 4: 何かに秩序を与える (place a bet 賭けをする) 5: 高く位置づける 特に競争において 2 番目にランクする

場所は相対的な用語においてコンテキストや背景として、過程における結果や生産物として、さらには活動的で動態的なものとして定義される。こうした多面的な定義はこの用語の複雑性を示している。そして、地理学者たちも、一般の人々と同様に、その用語を多様な方法で援用している。本節では、地理学者によって使用されるこうした場所の定義を提示する。以下では、とりわけ5つの場所の概念化を検討していく。

- ・ 物理的な位置としての場所
- ・ 文化的小および社会的位置としての場所
- ・ コンテキストとしての場所
- ・ 時を経て構築されたものとしての場所
- ・ 過程としての場所

物理的な位置としての場所

これは最も明確な場所の定義であり、場所は物理的な“もの”と認識されている——人はある場所を地図に落とすことができ、ある場所を散歩できるとい

うこと——。場所は物質として、地上にあるものとして、境界づけられるものとして概念化され、地理学的研究の焦点は、場所の特有で、時に独自性を持つ特徴に関心が向けられている。ジョーダン・ピチコフとドモシュによって提示された定義は、こうした場所についての考え方に由来している。この概念化が政治研究に関連する限り、例えば革命の比較研究のように、しばしば場所は背景に還元されている (Tilly, 1978)。

物理的な位置としての場所は、より抽象的な概念である空間とよく対比される。もし場所が地上にあるもの、特有なものであるならば、空間は特有なものを抽象化したものとして理解される。これらを踏まえた上で、空間の研究や具体的な場所を連結する関係性についての研究が、空間科学の関心の的となっている。こうした研究の多くは、場所の特異性を捨象しているようで、「等方性平面 isotropic plane」や政治行動の起こる特徴のない地表が想定されている。すなわち、物理的な位置の重要性は、他の位置との相対的な位置付けに要約されている (Guest et al. 1988; O'Loughlin et al. 1998)。これらの研究は、現象の根底にある空間的な関係性に焦点を当てており、研究者たちの意図は場所の特異性を考慮することではなく、パターン的一般性を認識することにある。時には、オロッコリンの拡散研究のように、一般的なパターンの検討は単に分析の初歩段階で、その後の分析段階では場所の異なった理解が事例研究に含まれる場合もある。

文化的あるいは社会的位置としての場所

2 番目の場所の意義は、しばしばメタファーとしての意味から構成され、物理的な位置としての場所の枠組みと対照を成している。この視角はフェミニズムやカルチュラルスタディーズを取り入れた研究者、また人々や集団の社会的な位置に関心を示す研究者に関係している。この視角によれば、人々は、自らのアイデンティティやポジションリティを形成する文化的、社会的、経済的、政治的関係性の網の中に位置づけられる。

地理学者たちは、これらの社会的位置が単にメタファーとしてだけではなく、都市や地域の中の現実的で物理的な場所と関連していると論じている。例

えば、ティム・クレスウェル（1996）は道徳景観 *moral landscape* について書いているが、そこでは、ある種の人々や行為がある種の場所に「属している *belonging*」—「場所に」存在する *being "in place"*—と考えられている。具体的には、欧米諸都市において、女性は歴史的に家庭や教会、近隣などの私的な場所に位置づけられていた。これは、彼女たちにとっての（物理的、隠喩的どちらにも）適切な位置として認識されており、当時のジェンダーの役割や関係性の社会的構築性は所与とされていたのである。対照的に、商業や産業、政治に飛び込んだ女性たちは「場違い *out of place*」であり、社会的・物理的双方の境界や場所の道徳に背いていたのである（Bondi and Domosh, 1998 参照）。しかし、多くの女性たちが公的／私的な場所の境界を破るにつれて、都市の物理的空間は女性を受け入れるよう徐々に変容した。同時に、女性たちの逸脱が社会関係やアイデンティティを再構成し、「公的な」場での女性の存在が、公的な女性たちへのまなざし—女性たちによるまなざし、あるいは彼女たちを見る他者からのまなざし—を徐々に変容していった。ミーガン・コープ（1996）は、この変容と「場所における様々なアイデンティティ *identities-in-place*」の再生産の観点から、女性のアイデンティティへの影響を論じている。

上述したように、カルチュラルスタディーズやフェミニズムやアイデンティティ・ポリティクスを取り入れた研究において、この概念化はごく一般的なものである。地理学者は幾分当惑しながらも、これらの研究で行なわれる「場所」についての議論に関心を向けている。それとともに、地理学者は、社会理論に取り込まれている「境界」「ロケーション」「マッピング」「場所」といった空間的な概念に進んで接点を見出そうとしている。これらのメタファーは、社会関係における空間や場所の重要性に注目することで、複雑な社会関係の説明にとって親しみやすく、常識的な概念を導いている。一方で、地理学者たちの議論では、空間的メタファーは単なるメタファーではなく、行為に対する意味形成に際して、空間や場所の役割に注目させるような方法に基づくものなのである（Smith and Katz, 1993）。

コンテキストとしての場所

もし地理学が場所を論点とするならば、政治研究は「コンテキスト *context*」を論点とするだろう。そのため一見すれば、コンテキストの観点から場所を定義することは困難を招くように思われる！しかし、ニコラス・エントリキンは、「場所の地理学的概念とは、出来事や対象、行為の地域的コンテキストに言及するものである」（1991, p6）と、場所を定義する方法を正確に提示している。この定義はそれまでの定義を特徴付けていた、社会的・政治的・経済的・文化的な関係性への関心を多くの点で共有するものである。しかし、地理学者がコンテキストについて語る時は、まずはそれらの関係性が空間や場所にかかっているかに注目し、それから次にそれが人にどう付随しているかに注目する。すなわち、この意味で場所は、地域単位での社会的な位置づけとともに、政治行動を形成するような、地域単位に規定される環境 *milieu* を表現するものである（Agnew, 1987）。この際、前述した「場所の中におけるアイデンティティ *identity-in-place*」の理念とは対照的に、コンテキストを「場所のアイデンティティ *identity-of-place*」と考えることができるだろう。

コンテキストとしての場所の定義づけは、比較的、地理学の議論になるものではない。私たちは、コンテキストが社会的行為のための状況や環境を提供すると論じるが、それは、私たちが「地理が大事だ！」（Massey and Allen, 1984）と主張する理由の一つに過ぎない。しかしながら、この概念は政治研究では活発に議論されている。例えば、政治学者は政治行動における「個人の人口学的属性」の研究に関心を向けている。これらの属性の効果は、政治的態度や政治行動への影響と考えられる人口統計的特性（学歴や収入など）に由来している。個人レベルでも、例えば選挙行動などの政治行動において、これらの特性は有力な *predictor*（予測に用いられる素数のこと）とみられている。これは、過去数十年間において、政治研究で支配的だった方法論的個人主義に合致する。一方で、政治学者の中には、コンテキストや近隣効果を引き起こす影響は不正確で不完全な測定の結果であり、私たちがコンテキストと呼ぶものは、ただの残差であるか、もしくは誤差である

とさえ論じる者もいる (King, 1996)。

こうした議論に対して、地理学者は第一に、場所は個別的であるとともに権力関係の網の中にも位置しているが、場所の特性は単にそこでの居住者の社会経済的属性の集約ではないと応答している。それに続いて、地理学者は、社会経済的属性効果がローカルなコンテキストにおいて——場所において——意味を帯びると論じている (Johnston, 1991)。例えば、中流階級世帯を中心とした近隣での中流階級の持家世帯に比べ、そうした近隣で生活保護を受け、借家に住む低所得の母子世帯はある種、特異なものという意味づけられる。ある地域に対するある人の社会的な位置づけは、政治的態度や政治的行為のための表現手段や活動の実効性に影響を与えるかもしれない。その場合、コンテキストは2つの方法で政治行動に関係していると見なされる。第一に、コンテキストは、多様な主体が関わった出来事の意味や解釈上の枠組みを構成する。第二に、コンテキストは行為のための資源を提供する。端的に言って地理学者は、社会経済的属性効果とコンテキスト効果が双方どちらも重要であり、場所は個人間、社会集団間、そしてより広範囲な政治構造の間を介在していると論じている。こうしたことから、エントリキン (1991) は「場所のあいだ *betweenness*」を論じ、カービー (1985) は「場所における行為」を理解する必要があると主張している。

時を経て社会的に構築されたものとしての場所

これまでの定義は「場所」概念の複雑性を提示してきた。こうした定義をまとめることで、場所の地理的、物理的特性の相互関係や、場所がより広い関係性の網の中で位置づけられる方法、さらにはそれぞれの場所が広範囲な関係性とともにも場所それ自体に位置づけられる方法を考察できるだろう。その結果として、時を経て社会的に構築される場所という概念が浮き上がってくる。この視角では、場所は動的であり変化するものなのである。

社会的に構築される場所の概念は、社会構築主義者によるアプローチと共通するが、場所の構築を経験的に明示することは難しい。より直感的にアクセス可能なアプローチの一つを提示したのがドリーン・マッシー (1979) である。彼女が提示する地質

学的メタファー *geological metaphor* は、人間の行為が何年間か積み重ねられることで、場所を構成する建造的・社会的形態が構築されることを示している。これらの形態は、広範な経済的、政治的構造での転換によって生じる変化に反応しようとする人々に対して、資源や障壁どちらも提供する。このメタファーは、前述したコンテキストの要素が単に政治の展開する地表だけではないとの認識を暗示している。むしろ場所とは、場所を作り、作り直す活動が層となった結果なのである。例えば、パトリシア・マーティン (1999) が合衆国とメキシコの境界における経済開発のリーダーたちの取り組みを検証したのは、この場所の理解があつてのことである。彼女は、場所の促進効果がローカルな権力構造の安定性についての理念を生み出す方法とともに、経済の変化に応じた労働力を確保するリーダーの能力についての理念を導く方法を明らかにしたのであった。こうした状況の中で、ローカルなエリートたちの経済開発戦略には、安定性と柔軟性が緊張状態にある。

この場所の理解の仕方は、歴史的な意味において構成されている。そこでの歴史的な意味とは、過去の場所形成に含まれる社会的・経済的・政治のプロセスが、決定的とは言わないまでも、依然として現代での場所形成に重要であるということである。そうしたことから、連続性と変化の間の緊張関係がこの概念化の中に組み込まれているのである (Harvey, 1985 ; Smith, 1984 を参照)。しかし、地質学的メタファーに言及した場合は、場所の構築がどこなく自然で不可避なものであることを意味している。そうした自然さが受け入れられる限り、それはまた、場所が政治的行為に動員される——あるいはされない——道筋を形作るのである。さらに、層を構成するメタファー *layering metaphor* とは、場所の中に一つないし二つのレベルを掘り下げ、分析できるような層位の存在を暗示している。もちろん、これは実際の層位学者の仕事ではないし、それ自体メタファーで表されるものでもない。とはいえ、そうしたメタファーが物理的な記録から読まれる明確なレイヤーの分析を提示する限り、それは誤解を招きやすい。社会的に構築される場所を考えることは、主としてレイヤー間の相互関係や政治行動に影響を与える場所の用途や意味に関心を向けることである。

それゆえ例えば、キャロライン・ネーゲル (2000) は、バイルートという場所に付与された意味づけや、都市の歴史形成に関する社会—政治—宗教的關係性を詳細に説明することで、バイルートの復興の政治を検証している。彼女は、レバノン内戦後における都市再建を、特有の方法による都市の歴史の提示であり、将来をも方向付ける試みであると論じている。

社会的過程としての場所

以上に検討した定義は、場所が結果や生産物であることを含意していた。筆者が考察したい最後の場所の概念化は、場所を結果として考えることを避け、場所を過程として常に生成するものとして強調するものである。

ジョン・アグニュー (1987, p. 87) は、過程としての場所について明確な考え方を提示してくれている。彼は場所を3つの要素を含意するものとして概念化している。

ロカール：社会的な関係が構成される環境（これらは非公式でも制度的でもありうる）

ロケーション：より広いスケールで作用する社会・経済のプロセスによって規定されるものとして、社会的な相互関係のための環境を取り囲む地理的な地域

場所の感覚：ローカルな「感情の構造」... 場所のローカルな社会世界（ロカール）は、ロケーションの客観的なマクロな秩序と、場所感覚の主観的な領域的アイデンティティとは切り離して理解することはできないということが主要な理念。

こうした概念化がこれまでの概念化から導かれるとともに、それは他の概念が軽視し、組み込んでこなかった相互連携的な問題を際立たせている。最も重要なことに、この概念化は様々なスケール——マクロ経済から個人まで——で展開する過程における相互関係、つまり場所の過程を強調している。これは場所を他の場所との関連とともに、グローバル経済や国家の中に位置づける点で好都合ある。したがって、場所は「個別的」でも「単に特有のもの」や「単なるローカル」というわけでもない。場所は、ロカールを広範囲な過程や他のロカールに複雑に接合するものとして見なされている——結合性、過程、

場所、それぞれは常に流動的である—— (Massey, 1994)。これは様々なスケールで作用しているロカールや制度が、政治行動のための機会を提供する方法とともに、ロカールを結合させる権力の網——マッシーの用語では権力の幾何学——を分析する方法を提供している (Cox, 1998)。

この定義には、いかに場所が構築され、政治に動員されるかについての豊富で複合的な理解が組み込まれている。この定義において場所は、物理的で社会的な位置を組み込むものとして、場所におけるアイデンティティ *identity-in-place* の意味を場所のアイデンティティ *identity-of-place* の意味と結びつかせるものとして、さらには、行為のためのコンテクストとともに、そのコンテクストが作られる過程での持続的な行為の目的として理解される。しかしながら、この定義が既存の全ての定義と連携していると考えられる一方で、分析的かつ経験的な意味でこの定義を利用することは驚くほど難しい。したがって、この場所の定義を組み入れた政治研究は、おそらく理論的になりがちであり、いくつかの点で根拠がないように思えるかもしれない。この場所の定義は、例えば構造化論的アプローチや根源的民主主義の理論においてしばしば行使されるが、これらのアプローチはともに抽象的過ぎると批判されている (Jones and Moss, 1995; Wilson and Huff, 1994)。したがって、この場所の概念によるアプローチは、一般化可能性、つまり一般的に受け入れられる社会科学の特徴を無視したものとなっている。

一方で、政治評論家の中には、この定義が場所に接近する有効な方法だと認識する者もいる。例えば、公と私の境界変化の識別に関心——政治的エージェント、政治空間、政治圏がいかに構築されるかという関心——を示すフェミニストたちはこの定義を利用している (Staeheli, 1996)。マイケル・ブラウン (1997) もまた、ブリティッシュコロンビア州バンクーバーでのエイズを巡る政治の分析において、この場所の概念に依拠している。そしてジョン・アグニュー (1987) は、スコットランドやイタリアにおける政治に関する研究において、その概念を展開している。しかし、このように過程としての場所を理解する必要性が認められ、またこの理解を経験的な研究に組み込むことが賞賛されている一方で、この

アプローチが体系的で経験的な分析の方法ではなく、理論的な用語において議論されていると指摘することもおそらく当を得ているだろう。そうした上で、この定義は、一部特定の研究において実際に検討されているかもしれないが、ある種の理論的な視角を含んでいる。こうした研究は概観を提示することの重要性を含んでいるが、日常生活の本質と場所の過程の一部である政治を緻密に組み合わせることは非常に難しくなっている。

II. 場所と政治研究

以上のように、場所の概念化に注目してみると、場所の理念があらゆる形態の政治研究の中心であると考えたくなるかもしれない。再度言う。それは間違っている！1980年代から1990年代初め、地理学者たちは政治研究において、場所が一般的に注目されていないことを嘆き、場所が静的で、固定されており、ほとんど容器のように理解されていることに不満を持った(Agnew, 1987; Harvey, 1996; Kirby, 1985; Massey, 1994; Smith, 1984; Soja, 1989)。ある段階において、場所の概念化に関する議論は、場所の本質が学問の領域に限られている、すなわち、それは象牙の塔において知識人たちが悩むもので、現実に展開する政治の代物ではないとの結論に結びついていた。しかしながら、新聞を一瞥するだけでも、場所それ自体が時に政治的闘争の対象であったり、様々な場所の定義が闘争の一部になっていたりするのがわかる。領土紛争(コソボやエルサレム、カシミールいずれにせよ)や大統領選挙における選挙人団の戦略、デモや抗議すべては、場所についての争いなのである。これらの闘争は全て場所において起こり、場所の統制や場所にあるべきことについての闘争が含まれるかも知れない。換言すれば、それらは場所の道徳景観を巡る闘争なのである(Cresswell, 1996)。

本節で筆者は、政治行動や政治闘争に対する様々な場所の定義についての意義を例証したい。筆者はこれを行なうために、場所が政治的闘争に関係する4つの方法に焦点を当てる。場所についての政治 politics *about* place, 場所における政治 politics *in*

place, 場所構築における政治 politics *in the construction of* place, 場所を配備する政治あるいは場所の道徳を犯す政治 politics that *deploy or transgress* place である。本書の幾つかの章ではすでに、政治的闘争におけるこれらの場所の役割を幅広く扱っているため、ここで提示する事例はかなり大まかなものとなっている。ただし、他の章の多くが“大きな政治 big politics”——マクロスケールの過程、国家、エリートなどを含む——を扱う一方で、本章で提示される事例のほとんどはより小さな政治、つまりマン(1994)が名付けたマイクロポリティクスを対象としている。筆者はいかなる場合でも、場所が個別主義的で、「単なる地域的なもの merely local」(例えば Harvey, 1996)との批判から生じる、政治における場所の役割を恐れる傾向に反論したい。同時に、場所に根付いた政治が必然的に進歩的な政治を導くような印象を生み出すことを避けたい。その代わりに、政治的行為の目的を実際の戦略から直接的に読むべきではないことを認識しながら、場所が政治に動員される方法を検討していく。

場所についての政治

ナショナリストの闘争や領土紛争とは、他の政治的資源の配分を巡る争いに場所の支配が関わる闘争のことである。しかし、日常生活のより小さなスケールで起こる場所の支配の問題に関与する争いも存在する。それらの闘争には、「縄張り争い turf conflicts」として分類されるものや NIMBY 的態度などが含まれる。

縄張り争いは広範囲に及ぶものであるが、われわれはそれらを都市に「位置付ける」ことが多い。現実には、ほとんどの個人は自分の運命をコントロールしていない。つまり、そうした制御不能の意識はグローバル化の過程に影響を受けており、意思決定はますますローカルや「庶民」から剥奪されている(Greenberg, 1995)。そのような変化や抑圧に直面する中、個々人はしばしば自分ができることをコントロールし続けようと務めるが、これは、個々人が住む場所をコントロールすることを意味するのかもしれない。こうした争いは多くの形態をとって表れる。つまりこれらは、グラフィティ(Ley and Cybriwsky, 1974)を通しての縄張りの設定からゲ

ーティッドコミュニティや近隣の指定 neighborhood designation (Davis,1990), そして NIMBY 主義 (Lake, 1993) までをも含んでいる。コックスとマッカーシー (1981) が論じるように、縄張りの政治——筆者の言い方では、場所についての政治——とは、より広域的なスケールの影響力から生活を守ろうとする人々の能力を低減させようとする力に直面する際の、コントロールの幻想を維持することである。

上記のことが真実である限り、場所についての政治は、時に物理的位置として場所を守ろうとする行動を含む。しかしながら、ここで物理的位置とは、長期間にわたって再構築され、再生産される文化的社会的ロケーションを意味する。この観点から見れば、NIMBY 主義は、地域の居住者にとって不利に働くと信じられている変化を妨げようとする試みとして考えられる。これらの試みは現状を強化するかもしれないし、社会的不正に対応しようとする試みを阻止し、否定的で反動的な意味を含むかもしれない (Harvey, 1996 を参照)。しかしながら、場所についての政治は、場所や社会関係を破壊させる変化を阻止しようとする戦略でもありうる (Porteous,1989)。そのため場所についての政治が、特に社会的公正の関心を含む他の政治課題と結合した時には、それらは進歩的ではなく、また純粋に保守的でもない。例えば、活動家が貧困の近隣地区や有色人種の割合が高い近隣地区での有害施設の立地に関して闘争する時、環境正義運動の要素の中には、NIMBY 主義の要素が含まれる場合もある。しかし、「イーストロスアンジェルス」の母たち (Pardo,1990) や「労働/コミュニティ戦略センター」 (Pulido,1994) のような組織は、より大規模な人種の経済的統合のための戦略に場所についての政治をリンクさせている。これらの事例においては、場所についての政治を反動的ではなく進歩的と見なすことができる。

場所における政治

この政治の形態は、コンテキストとしての場所の定義と密接に繋がっている。場所における政治は、もしくはカービー (1985) がそれを「場所における活動 activity-in-place」と名づけたように、場所が

提供する資源を人々が意思決定し、日常的な（それでもなお政治的である）生活を送るものとして認識している。例えば、ハックヘルトとスプレグ (1996) は、個人が生活活動を行う時に構築する情報のネットワークを分析し、そして政治的（政治的な態度と政治参加から構成される）情報の源を辿るために、これらのネットワークを利用している。地理学者たちはこれを「友人と近隣」効果、コンテキストの重要な側面と呼んでいる。

ハックヘルトとスプレグは、手段的としての観点から政治的なネットワークを検証しているが、場所における政治の理念をより共同体主義的で、表現に富む政治を促す目的で使っている研究者・論者もいる。例えば、ダニエル・ケミス (1990, p122) は、場所における政治が住民によって共有される共通関心・利害を明らかにする一つの方法になると論じている。この意味において、場所は物理的な位置であり、かつ行為のためのコンテキストとなっている。彼は「共有の場所で共に住んでいる」との認識が、場所から分離される政治（例えばサイバープレスや連邦政府）ではめったにそうならないようなやり方で、可能な限り協力的で進歩的な政治の習慣を生み出すと論じている。

ケミスの議論は、政治と日常生活との再接続を望む人々には魅力的である。しかし、コミュニティに基づいた政治の断片的で、時に排他的な側面に関心を示す人々には魅力的ではない。多くの人々は、ケミスのような共同体主義の議論に潜在する「ロカリティ・場所」と「コミュニティ」との同一視には不安を感じている (例えば Agnew, 1987)。ケミスや共同体主義者たちは、場所に愛着を持たない人、あるいは異なった愛着を持つ人々を排除することはないものの、共同性の主張にはある種の政治的な行為者たちや態度を周縁化する効果を伴うのである。端的に言えば、場所のアイデンティティが社会的なアイデンティティや社会的地位と同一視される時、場所における政治の共同体主義的見解は、社会的差異の理解や克服というよりもむしろ、それらを覆い隠す効果を持つかもしれない。

場所の構築としての政治

ナショナリストの闘争は、場所と社会的アイデン

ティティを同一視することで場所を創造する企ての実例となろう——人々は場所の創造を通して社会的統一になる——。ナショナリストの闘争の幾つかの側面は、場所を構築するための政治的活動として考えられ、同様に、投資をひきつけようとする経済開発戦略は、グローバル経済競争に勝つための場所を構築し、かつ再構築する活動として考えられている(例えば Jonas and Wilson, 1999; Martin, 1999, Nagel, 2000; Sorkin, 1996 を参照)。ナショナリズムと経済開発はともに、場所の社会構築的な定義を含意しており、そうした社会的構築の背後にある政治の存在を露呈している。

また、場所の構築に関する政治的闘争は他にも存在し、そこでは意味や目的に関する闘争と場所が時間とともに構築される方法とが関係している。すなわち、私たちが公的や私的な場所について考えられるのは、このコンテキストにおいてである。公共性とプライバシーについての考えは、民主主義や市民権に関する多くの論争の中核をなしている。しかし、地理学者たちは、この論争のほとんどが公と私の空間性を無視していると論じている。つまり、市民が集まる場所や環境がなければ、公共圏という抽象的概念を操作できないということである。ある時代における、あるタイプの人々や振る舞いのアクセスを拒否し、制限することによって、「公共」を制限し、抑圧することが場所の特徴——物理的社会的な特徴と意味——でもある。

フェミニストたちは、「公共」として構築される場所が女性のアクセスを拒否する方法に長く注目してきた。例えば、ハーバマス (1969) による公共圏の考えは当初、18 世紀のヨーロッパ社会を念頭に説明された。しかし、18 世紀の社会空間はジェンダー化されており、女性が公共圏に参加できる場所は少なかった。街路、商業地、統治の場所などは、全て女性のアクセスが制限される場所である。これらの制限は法律というよりも、むしろ実践を通して構築されているように、現実のものである。例えば、クーパーほか (2000) は、19 世紀の変わり目までニュージーランドの公共空間において女性用化粧室が設けられていなかったことを、公共空間から女性を排除する有力な手段であったとして論じている。彼女たちは、女性用化粧室を公共空間についての考えを

再構築する物理的構築物としてみなし、市民としての女性の地位の確立と公的な女性用化粧室の設備とが同時に起こる変遷を辿っている。このように公共空間に関する同様の政治的闘争は、セクシュアリティ (Bickell, 1999)、都市公園の構築と再構築 (Mitchell, 1995)、ホームレスのための施設やサービス供給 (Smith, 1996; Wolch and Dear, 1993) を巡っても起こっている。これらの全ての事例において、物理的社会的な場所の構築が、政治的過程や政治的目的の獲得にとって中心となっている。

場所を配備する政治

政治における場所の最後の役割は、場所の構築の考え方と密接に繋がっているが、筆者はある理由によってそれを分けて考えたい。場所を配備する政治は自覚的な逸脱への努力を含んでいる——ティム・クレスウェル (1996) はそれを、政治の議論を生み出す方法として、場所の道徳景観を妨げようとする自覚的な努力と言及している——。例えば、公的と私的な場所は時間の経過や政治的闘争を通して構築されるが、場所を配備する政治には、ジェンダー化された公共の場所の構築を顕在化させ、意義を申し立てるような企てが含まれている。

抗議運動は場所の道徳を破る最も可視的な方法である。例えばクレスウェル (1996) は、グリーンナムコモン女性平和キャンプが単なる女性たちの核兵器に対する反発ではないと論じている。ただし、これ自体はさほど注目すべきものではない。むしろ、イギリスの国民や報道機関が恐怖を示すのは、女性の抗議者によって用いられる逸脱の戦略から発せられるものである。女性たちは自分の子供や家族を放っておき、何ヶ月もキャンプを張り、公衆の面前で生活した。彼女たちは、表向き女性がなじむ、こぎれいで清潔な屋内の場所ではなく、ドロだらけの屋外の場所にいた。そして、彼女たちは塀の外にいたのではなく、基地内に不法侵入し、タンポンを隠すのではなく、わざわざフェンスに掛けてみせたのであった。これらの空間的逸脱の小さな運動が——核兵器の議論にとっては取るに足らない行為であろう——、必ずしも抗議の組織者たちが意図した方法ではないとはいえ、抗議への関心を集めた。同様に、ブエノスアイレスのプラザ・ド・マヨでは、女性たち

が自分たちの家族が失踪したことを抗議するために、プラザ・ド・マヨを行進することで場所の逸脱を行なった。彼女たちは、残忍な政権に抗議するために母として行進したのであった (Radcliffe, 1993)。これらの2つの女性集団は、場所に基づいたオルタナティブな道德景観を配備し、助長することで、権力や残忍性に基づいた道德景観に挑んだのである。

結論

場所。それは実に厄介な概念であるため、入門書がおしなべてその用語の簡単な定義を避けていることは不思議ではない。この用語が議論される一つの理由は、この用語が使用者の方法論的、認識論的、存在論的視角と関連するからである。空間科学の方法を利用する者は、場所を物理的な位置として概念化する傾向にある (本書第3章のオロッコリンを参照)^註。同様に、場所の接続性 *connectivity* や社会構築性を強調するアプローチは、構造と人間の行為の相互関係を通して社会が構築されるという考えからなされている。すなわち、より広い構造化過程のうち、場所は一つの側面にすぎない。ジョーダン・ピチコフとドモシュ (1999) による定義が指摘するように、場所の定義の探求はより根本的な哲学の問題への考察を導くのである。

場所が政治的闘争において配備される方法の背後にも政治がある。社会的に構築されるものとしての場所概念は、場所の根源的な権利を主張するナショナリストたちや、自分の振る舞いが社会にどのような影響を及ぼすか関係なく、財産権を守ろうとする持ち家層とは矛盾している。これらの闘争において、場所が現実的で、実体的で、固定されたものであるという主張には政治的意味がある。一方で、もし場所を組織する方法が、社会の権力関係に反映すると主張したいのならば、場所の定義づけにおいて、社会的構築性やアイデンティティの形成過程との関係性に注目することがより意味をなすのかもしれない。その際、場所の定義の差異は、政治的な戦略や目的を反映するのである。

最後に、政治的エージェントの政治戦略と研究者たちの哲学との間の差異は、場所の概念化の議論(ことによれば混乱!) の一因にもなっている。研究者たちは、いつも研究の対象とする人々と同じ定義を

使うわけではないのである。例えば、実際の闘争に関与する人々が使わないにもかかわらず、社会構築的な定義を援用するナショナリズムの研究もある。他の事例では、社会関係に批判的な研究者はそうした関係を**変革**したいのかもしれない。研究者たちは場所の道德景観の確認を最終目標とするのではなく、逸脱や新しいものの構築、おそらくあまり搾取的ではない景観を検証する場合もある。再度繰り返すが、場所の定義と場所が位置づけられる目的それ自体には、政治が含まれているのである。

以上のように、場所は何らかの所与のコンテキストのなかで、様々な方法によって動員される。こうしたことが、実に扱いにくい場所の概念を生み出している。場所は主観的な意味と構造的な位置の両方を含み、結果でありまた過程なのである。場所についての理念やその意味、そして意義は多くの人々の心に深く根付いている。場所を政治的行為の動機や形成要因として、さらには政治的闘争における効果的なツールや戦略として構成するのは、場所が提供する資源と組んで、根深く持続し、時にせめぎあう場所への愛着なのである。

付記

本稿は、2004年大阪市立大学大学院人文地理学特殊問題研究IVで取り上げたもので、訳出に際しては、大阪市立大学地理学教室の山崎孝史先生に大変お世話になりました。ここに記して謝意を示したいと思います。

注

O'Loughlin, J. (2003): *Spatial analysis in political geography*. J. Agnew, K. Mitchell, and G. Toal (eds.) In *A Companion to Political Geography*. pp. 30-46.

文献

Agnew, J. (1987): *Place and Politics: The Geographical Mediation of State and Society*. Boston: Allen & Unwin.
Bickell, C. (1999): *Heroes and invaders: gay and lesbian pride parades and the public/private distinction in New Zealand media accounts*. *Gender, Place and Culture*, 7, pp.163-178.

- Bondi, L. and Domosh, M. (1998): On the Contours of Public Space: tales of three women. *Antipode*, 30, pp.270-89.
- Brown, M. (1997): *RePlacing Citizenship: AIDS and Radical Democracy*. New York: Guilford.
- Cooper, A., Law, R., Maulthus, J., and Wood, P. (2000): Rooms of Their Own : public toilets and gendered citizens in a New Zealand city, 1860-1940. *Gender, Place and Culture*, 8, pp.417-433.
- Cope, M. (1996): Weaving the everyday: identity, space and power in Lawrence, Massachusetts, 1920-1939. *Urban Geography*, 17, pp.179-204.
- Cox, K. (1998): Space of dependence, spaces of engagement and the politics of scale, or: looking for local politics. *Political Geography*, 17, pp.1-23.
- Cox, K. and McCarthy, J. (1981) : Neighbourhood Activism as a Politics of Turf: a critical analysis. In K. Cox and R. Johnston (eds.) *Conflict, Politics and the Urban Scene*. New York : St. Martin's Press, pp. 196-219.
- Cresswell, T. (1996): *In Place/Out of Place*. Minneapolis, MN: University of Minnesota Press.
- Davis, M. (1990): *City of Quartz*. New York: Verso. (マイク・デイヴィス／村山敏勝・日比野啓訳 (2001) : 『要塞都市 LA』 青土社.)
- Entrikin, N. (1991): *The Betweenness of Place*. Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press.
- Greenberg, S. (1995): *Middle Class Dreams*. New York: Times Books.
- Guest, A., Hodge, D., and Staeheli, L. (1988): Industrial affiliation and community culture: voting in Seattle. *Political Geography Quarterly*, 7, pp. 49-73.
- Habermas, J. (1989): *The Structural Transformation of the Public Sphere*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Harvey, D. (1985): The Geopolitics of Capitalism. In D. Gregory and J. Urry (eds.) *Social Relations and Spatial Structures*. New York: St. Martin's Press, pp.128-163.
- Harvey, D. (1996): *Justice, Nature, and the Geography of Difference*. Oxford: Blackwell.
- Huckfeldt, R and Sprague, J. (1987): Networks in context: the social flow of political information. *American Political Science Review*, 81, pp.1197-1216
- Johnston, R. J. (1991): *A Question of Place*. Oxford: Blackwell. (ロン・J.ジョンストン／竹内啓一監訳・高田普久男訳 (2002) : 『場所をめぐる問題——人文地理学の再構築のために——』 古今書院.)
- Johnston, R. J. et al. (2000): *Dictionary of Human Geography*. Oxford: Blackwell.
- Jonas, A. and Wilson, D. (eds.). (1999): *The Urban Growth Machine*. Albany, NY: State University of New York Press.
- Jonas, J. P and Moss, P. (1995): Democracy, identity, space. *Environment and Planning D: Society and Space*, 13, pp.253-257.
- Jordan-Bychkov, T. and Domosh, M. (1999): *The Human Mosaic : A Thematic Introduction to Cultural Geography, 8th edn*. New York: Longman.
- Kemmis, D. (1990): *Community and the Politics of Place*. Norman, OK: University of Oklahoma Press.
- King, G. (1996): Why context should not count. *Political Geography*, 15, pp.159-164.
- Kirby, A. (1985): Pseudo-random thoughts on space, scale and ideology in political geography. *Political Geography Quarterly*, 4, pp.5-18.
- Lake, R. (1993): Rethinking NIMBY. *APA Journal*, 59, pp.87-93.
- Ley, D. and Cybriwsky, R. (1974): Urban graffiti as territorial markers. *Annals of Association of American Geographers*, 64, pp.491-505.
- Mann, P. (1994): *Micro-politics: Agency in a Post-feminist Era*. Minneapolis, MN: University of Minnesota Press.
- Martin, P. (1999): On the frontier of globalization : development and discourse along the Rio Grande. *Geoforum*, 2, pp.217-235.
- Massey, D. (1979): In what sense a regional problem? *Regional Studies*, 13, pp. 233-243.
- Massey, D. (1994): *Space, Place, and Gender*. Minneapolis, MN: University of Minnesota Press.
- Massey, D. and Allen, J. (1984): *Geography Matters!* Cambridge : Cambridge University Press.
- Mitchell, D. (1995): The end of public space? People's park, definitions of the public, and democracy. *Annals of the Association of American Geographers*, 88, pp.545-574. (ドン・ミッチェル／浜谷正人監訳 (2002) : 公共空間は終焉したか?——民衆公園, 大衆の定義とデモクラシー——. 空間・社会・地理思想, 7, pp.90-117.)
- Nagel, C. (2000): Ethnic conflict and urban development in downtown Beirut. *Growth and Change*, 31, pp.211-234.
- O'Loughlin, J. et al. (1998): The diffusion of democracy, 1946-1994. *Annals of the Association of American Geographers*, 88, pp.545-574.
- Pardo, M. (1990): Mexican American Women Grassroots Community Activist "Mothers of East Los Angels". *Frontiers*, 9, pp.1-7.
- Porteos, J. D. (1989): *Planned to Death*. Manchester: University of Manchester Press.
- Pred, A. (1984): Place as historically contingent process:

- structuration and the time-geography of becoming places. *Annals of the Association of American Geographers*, 72, pp.279-297. (アラン・ブレット/西部均訳 (2004) : 歴史的にコンティンジェントな過程としての場——構造化と場所生成の時間地理学——. 空間・社会・地理思想, 9, pp.148-167.)
- Pulido, L. (1994): Restructuring and the contraction and expansion of environmental rights in the United States. *Environment and Planning A*, 26, pp.915-936.
- Radcliffe, S. (1993): Women's Place/El Lugar de Mujeres: Latin American and the politics of gender identity. In M. Keith and S. Pile (eds.) *Place and the Politics of Identity*. London: Routledge, pp.102-116.
- Smith, N. (1984): *Uneven Development*. Oxford: Blackwell.
- Smith, N. (1996): *The New Urban Frontier*. London: Routledge.
- Smith, N. and Katz, C. (1993): Grounding Metaphor: towards a specialized politics. In M. Keith and S. Pile (eds.) *Place and Politics of Identity* London: Routledge, pp. 67-83.
- Soja, E. (1989): *Postmodern Geographies*. Oxford: Blackwell. (エドワード・W・ソジャ/加藤政洋・西部均・水内俊雄・大城直樹・長尾謙吉訳(2003) : 『ポストモダン地理学——批判的社会理論における空間の位相——』 青土社.)
- Sorkin, M. (ed.). (1992): *Variations on a Theme Park*. New York: Hill and Wang.
- Staeheli, L. (1996): Publicity, privacy and women's political action. *Environment and Planning D: Society and Space*, 14, pp.601-619.
- Tilly, C. (1978): *From Mobilization to Revolution*: Reading, MA: Addison-Wesley.
- Wilson, D. and Huff, J. (1994): Introduction: Contemporary Human Geography – the emergence of structuration in inequality research. In D. Wilson and J. Huff (eds.) *Marginalized Places and Populations*, Westport, CT: Praeger, xiii·xxv.
- Wolch, J. and Dear M. (1993): *Malign Neglect: Homelessness in an American City*. San Francisco, CA: Jossey-Bass.